実習・デモンストレーションを中心とした少人数型授業の展開

特別支援教育講座・山下　光

（1）授業の概要

この授業は，大学院教育学研究科特別支援教育専攻の特別支援教育コーディネーター専修（1 年制課程），特別支援学校教育専修（2 年制課程）の合同授業である（後期開講）。

登録受講生は 7 名であった。内訳はコーデネーター専修が 6 名（内地留学生の現職教員 5 名，本学教育学部障害児教育教員養成課程平成 20 年度卒業者 1 名），特別支援学校教育専修が 1 名（内地留学生の現職教員）であった。また，聴講生が 1 名（現職の言語聴覚士，臨床心理士）あった。

この授業は特別教育コーディネーター専修の前期開講科目である「アセスメントの方法と計画」，「発達障害検査法演習 1（吉松靖文准教授担当）」と連動しており，「アセスメントの方法と計画」で学んだ理論的基礎をもとに，認知機能検査の実施法，採点法，解釈法，および解釈にもとづいた支援計画の立案を，実習（ロールプレイ）を通して学ぶことを目的としている。

特にこの授業では，幼児・児童の認知機能検査バッテリーである K-ABC の基礎理論，実施法，解釈法が中心になる。

当初の授業のスケジュールは以下の 15 回であった。

1．知的障害をどうとらえるかⅠ（知能と知的障害の定義）
2．知的障害をどうとらえるかⅡ（新しい知能観と知的障害）
3．知的機能の神経基盤とその障害
4．知的機能とその障害の評価法
5．神経心理学的評価とは
6．K-ABC の基礎理論
7．K-ABC の下位検査
8．ロールプレイ（K-ABC）
9．K-ABC の採点と評価Ⅰ（ロールプレイの結果を中心に）
10．K-ABC の採点と評価Ⅱ（LD，高機能自閉症，軽度知的障害）
11．知的障害の特定の側面に関する検査Ⅰ（感覚・記憶等）
12．知的障害の特定の側面に関する検査Ⅱ（運動・言語発達など）
13．知的障害の特定の側面に関する検査Ⅲ（注意・実行機能など）
14．アセスメント結果からみた知的障害
15．まとめ

テキストとしては，特別支援教育士資格認定協会編「特別支援教育の理論と実際：Ⅰ　概論・アセスメント」（金剛出版, 2007）を使用した。

（2）実際の授業の展開

初回の授業に際して，K-ABC を含む各種心理アセスメントの経験を尋ねると，受講生のほぼ全員が，すでに現場において K-ABC の実施経験があることがわかった。これは，これまでになかった傾向で，本年度の受講生が特別支援学校，あるいは特別支援学級での勤務経験を持つ者が多かったためであると思われる。

そこで，受講生全員と相談し，昨年までの内容よりも，応用的な側面を重視した内容を増やすことにした。そのため K-ABC に関しては，具体的な実施法や採点法の説明を最小限にとどめ，その分を理論的説明（特に脳神経系の解剖・生理との関係について），および解釈に関するディスカッションに充てた。

また，記憶，注意，遂行機能について成人用の神経心理学検査で児童・生徒に応用可能なもの（WMS-R, WCST, BADS，FAB, CAT，ROCFT, FAS 等）を紹介し，デモンストレーションやロールプレイを行った。

そのため，必ずしもシラバス通りの進行にはならなかった。

授業では自作のパワーポイント・プレゼンテーションと液晶プロジェクターを使用した。また，またそれを印刷したものを，適宜配布した。

また授業担当者（山下）の雑誌論文の別刷なども使用した。

（3）受講生による授業評価

授業最終日に実施したアンケートでは7名全員から回答が得られた。

①「授業にはよく出席しましたか」という質問には，7名中7名が「はい」と回答した。

実際の出席率も，1名が2回，2名が1回ずつ欠席しただけであった（欠席理由は病欠，家族の急病，修論研究の調査校との打ち合わせ等）。また，受講生の態度も非常にまじめであった。

②「テキストは適切でしたか」という質問には，7名中6名が「はい」と回答した。ただし，自由回答欄には「少し（値段が）高いのではないか」という意見もあった。

③「教員の説明はわかりやすかったか」という質問には7名中5名が「はい」と回答した。

④「内容は難しかったですか」という質問には7名中2名が「はい」と回答した。

⑤「教員が熱意を持って取り組んでいるか」という質問には7名中7名が「はい」と回答した。

⑥「小テスト，レポート，試験などは適切でしたか」という質問には7名中7名が「はい」と回答した。

⑦「学期全体での授業構成は適切でしたか」という質問には7名中6名が「はい」と回答した。

⑧「この授業があなたが知識を得るのに役立ちましたか」という質問には7名中7名が「はい」と回答した。

⑨「この授業を友人・後輩に勧めますか」という質問には7名中7名が「はい」と回答した。

自由記述では，「これまで聞いたことがなかった新しい検査法を学ぶことができてよかった。子どもの基礎データがあればもっといいと思う」，「検査の実習は，少しはずかしい気持ちもあったが，楽しかった」，「作業が多いので眠くならずにすんだ」，「前期の授業で習った理論が，検査を実際にやってみることで確認できてよかった」，「初めて聞く内容も多く，興味深かった。一部のテストは現場へ帰ってから実際に使ってみようと思う」，「学校では高価な検査道具を買う事が難しいが，特別な道具のいらない検査やネットなどで入手できる検査もあったので，そういうものは実際に子どもにやってみたいと思った」などの好意的な回答があった。

また，「だいぶ年をとってきているので，自分の脳が大丈夫か心配になった」，「検査をされる人の気持ちが少しわかったように思う。正直あまり気持ちのいいものではなかった」，「脳の話は何度聞いても難しい」，「検査で使われている統計的な概念があまりよくわからなかった」，「脳の機能について習った事や検査結果を，実際の学習指導にどう生かすかという点については，まだはっきりとはわからない」という回答もあった。

（4）反省点と総括

この授業は，教育学研究科で取得可能な複数の資格の資格認定科目に登録されているため，シラバス通りの進行が重要であるが，実際には前記のような理由もあって内容や進度を変更した部分があった。

受講生の K-ABC に関する予備知識や経験が本年度だけの特殊なケースなのか，今後も続く傾向なのかという点で，今後のシラバスの内容を検討する必要がある。もし，今後も K-ABC についてある程度実施経験を持つ受講生が多いのならば，昨年までの初心者を想定した実施方法や採点方法が中心になる内容を，より上級者向けの内容に変えていくべきであろう。

しかし，その中に実施経験のない受講生が混じることになると，その受講生に対しては難しすぎる，不親切な授業になりかねないので，今後も初回の授業で実際の受講生の状況を確認した上で，授業のレベルを調整する必要がある。

また，受講生が実際に検査の実施経験を持っていたことから，質問の内容にも例年より高度なものが多く，授業担当者が即答できない場合も少なくなかった。それに関しては，受講者間のディスカッションのテーマにし，授業担当者も一緒に考えることで対応した。また，授業終了後に文献で調べたり，検査に詳しい研究者から情報を得て，後の授業で回答した。また，時にはそれを踏まえて再度ディスカッションすることで，受講者，授業担当者ともに理解を深める機会になった。

その反面，受講生のほとんどが心理学の専門教育を受けていないので，心理統計やテスト，測定理論に関する知識が不十分であり，それが理解の妨げになる場合が少なくなかった。また，受講生からも，理屈を知らずに使っているようで不安であるという意見があった。

統計や測定に関しては，前期開講科目である「アセスメントの方法と計画」でもある程度は説明しているが，短い時間で理解してもらうのは難しいようである。

そのためもあってか，受講生にはテストの結果を無批判に受け入れる傾向が強いように思われた。現場での自分の観察を大切にし，検査結果を批判的に解釈することの重要性をもっと強調する必要性を感じた。